J S M *Mycotoxins*

www.jstage.jst.go.jp/browse/myco

Impression of the 1st China Mycotoxin Conference 2016

Shohei Sakuda

JSM Mycotoxins, **67**(1):43-44 (2017)
<http://doi.org/10.2520/myco.67-1-4>

JSM Mycotoxins is issued twice a year, one volume a year, by the Japanese Society of Mycotoxicology and the purpose of the journal is to publish results and technical information regarding mycotoxins. *JSM Mycotoxins* publishes Reviews, original results (Research Papers, Technical Notes, Notes, and Letters), Proceedings of special lectures, symposia, and workshops of the meeting of Japanese Society of Mycotoxicology

Japanese Society of Mycotoxicology
(http://www.jsmyco.org/MYCONTENTS/Eng/index_eng.html)

第一回中国マイコトキシン学会に参加して

作田 庄平¹

¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科 (〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1)

キーワード

国際連携, 中国真菌毒素学会

連絡先

作田 庄平, 東京大学大学院農学生
命科学研究科, 〒113-8657 東京
都文京区弥生1-1-1
電子メール: asakuda@mail.ecc.u-
tokyo.ac.jp

要旨

2016年6月に北京(中国)にて第一回中国マイコトキシン学会が開催された。同会議は中国での第一回の記念開催とのことで、国際マイコトキシン学会会長らとともに招聘されたので小文にて報告する。

(2016年12月15日受付)

2016年6月29日, 30日に, 北京で第一回中国マイコトキシン学会(第一届中国真菌毒素大会, 写真)が開催されました。第一回の記念開催とのことで、国際マイコトキシン学会会長 Antonio Logrieco, 次期会長 Roudolf Krska (2017年1月より会長), Biominの研究所長 Gerd Schatzmayr とともに, 日本マイコトキシン学会より筆者が会に招待されました。30日の午後には空港に向かったため, 一日半の短い参加でしたが, 学会の様子を以下の小文にてお伝え致します。

6月28日午後羽田発の便が北京の悪天候のため, 出発が大幅に遅れ夜中の12時過ぎの北京到着となりましたが, 29日は天候が回復し, 好天の中会場のホテルに到着しました。開会セレモニー(写真)のときに会場はほぼ一杯で, 参加者は300名と公表されました。開会セレモニーで中国農業部の方から挨拶がありました。中国語であったため挨拶の内容は分かりませんでしたが, 手元に英語の資料が配布されていて, その中に, 中国でのマイコトキシンによる損害は, 全ての事項を含めると, 少なくとも850億元(1兆4千億円程度)にのぼるとの記述があり, その甚大さをはじめて知りました。セレモニーの後, Purdue大学のJin-Rong Xu博士による特別講演がありました。*Fusarium graminearum*のトリコセシン生合成の制御機構に関する内容で, Tri6とTri10による制御メカニズムが主に語られました。スライドの大部分は英語でしたが講演は中国語でしたので, 日本から同行してもらった研究室の大学院留学生で北京出身の楊 笑然さんに所々通訳して

もらうスタイルで, 以後の講演も含めて内容の理解に努めました。

昼食は中国料理だけでなく, 寿司, ビールもあり驚きましたが, 楊さんによると本会の一般参加費は日本円で2万円とのことでした。昼食時には, Logrieco博士と中国におけるマイコトキシン研究のリーダーであるYang Liu博士とはなしをしました。Logrieco博士はその日の午後にあった自身の講演の中でもふれていましたが, ヨーロッパで新たにスタートしたMycoKeyプロジェクトの中で, 中国を最も重要なパートナーであると位置づけています。Logrieco博士とLiu博士のあいだでは, 2019年に中国で, 世界各国に声をかけ, 真の国際会議とも言える会議の第一回を開催し, その後定期的に同規模の国際会議を世界各地で開催することができればとの構想が出来ていて, 日本マイコトキシン学会にもぜひ協力をお願いしたいとのことでした。また, Liu博士から, 中国と日本の二か国間でマイコトキシンに関するジョイントミーティングを定期的に開催して欲しいとの申し出もありました。これら国際会議や各国との関係については, 当学会の今後の発展につながるかたちで積極的に対応して行くことが必要であると考えられます。

学会は, ①食品と飼料中のマイコトキシン汚染現状, ②マイコトキシンの形成とコントロールメカニズム, ③食品と飼料中のマイコトキシン汚染防除, ④マイコトキシンの検出とモニタリング, ⑤マイコトキシンの防除技術, ⑥マイコトキシンの毒性に関する研究, のセッションに分かれて発表が行われま

した。それぞれのセッションで10ずつの演題があり、発表者は研究室の主催者クラスが主で、前述のように全て中国語での発表でしたが、それぞれにまとまった仕事との印象を受けました。2014年に北京で開催されたInternational Mycotoxin Conferenceのときに比べても、中国においてマイコトキシン研究がさらに急速に広がり内容が充実して行っていることを実感しました。研究対象となっているマイコトキシンは、アフラトキシン、デオキシニバレノール、パツリン、オクラトキシンAが主でしたが、稲麴病 (false smut) に関する発表も見られました。

それぞれの発表での質疑応答が大変真剣かつ活発に行われることも印象的でした。

30日の昼には、Toxinsを出版しているMDPIの北京オフィスの編集長に会い、北京オフィスでは200名が働いているとのことを聞き驚きました。その後、Liu博士、Logrieco博士、Krska博士とISMYCO 2016でのすぐの再会を期して空港に向かいましたが、搭乗予定の飛行機の出発が悪天候により大幅に遅れ、羽田着が夜中の12時過ぎになり、往復共に寝不足を伴う出張となりました。

写真 開会セレモニーの様子

左からLiu博士、Krska博士、右から筆者、1人置いてlogrieco博士
会場はPresidential Hotel Beijing

Impression of the 1st China Mycotoxin Conference 2016

Shohei Sakuda¹

¹Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo, 1-1-1 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8657, Japan

The first China Mycotoxin Conference was held in Beijing in July, 2016. It was a memorable ceremony and I was invited with the chair of International Society of Mycotoxicology. Here I report the impression of the conference briefly.

Keywords: international alliance, Mycological Society of China